ジョルジュ・バタイユ
『花言葉』
『ドキュマン』の第３号、1929
江澤 健一郎訳

もちろん、花の香りと視覚は、ずっと昔から女性と男性の恋愛感情を目覚めさせているのだから、さらに簡単に花の催淫的な効果を認めることができるだろう。爆笑が、一方が他方を誘発したり繰り返してだんだんと広がるように、春になると何かが、自然のなかで輝かしく広まっていくのである。人間社会では多くのものが変化するかもしれないが、美少女や赤いバラが愛を意味することのような、自然な真理に勝るものはなにもないだろう。

まったく同様に説明不可能で、まったく同様に不変の反応が、少女とバラにそれとは非常に異なる価値を与えている。つまり、理想的な美という価値を。確かに、無数の美しい花が存在するのであり、花々の美は、まさに少女の美よりも稀ではなく、この植物の器官に特徴的である。このような性質を花に授けられる諸要素を、抽象的な方法で説明することはおそらくできない。しかしながら、花が美しいと言われるなら、それはあるべきものと一致して見えるから、すなわちそれ自体で人間の理想を表しているからだと、指摘するのも無駄ではないのだ。

少なくとも一見したところでは、おおむねそうである。しかし実際には、大部分の花はささやかな発達をしているだけであり、葉っぱとほとんど区別できず、まさにいくつかの花は、おぞましいとは言わずとも不快な印象を与えている。その一方で、もっとも美しい花々も、性器の毛むくじゃらな斑点によって、その中央で美しさを穢されているのだ。したがってバラの内部は、外見の美しさとはまったく対応していない

し、花冠の花びらを最後までむしり取ると、もはや穢らわしい様相をした茂みしか残らないのである。[2] 確かに他の花々は、紛れもなく優雅で非常に発達した雄蕊を示しているが、もう一度常識的に考えるなら、その優雅さが悪魔のものであることが分かるだろう。たとえば、いくつかの肉厚で卑猥な蘭は、あまりにも怪しい植物であるため、人間のもっともいかがわしい倒錯をその性質として考えたくなるほどである。しかし花は、器官の汚れよりも花冠の脆さによって裏切られているのだ。だから花冠は、人間的な観念の要請に応えるどころか、その破綻の徴なのである。実際、つかの間だけ輝いた後で、見事な花冠は陽光で穢らわしく腐乱して、そうして植物にとって目障りで萎れた汚点となる。堆肥の腐臭から養分をもらいながらも、花はそれを逃れて、天使のようで叙情的な純潔の高揚へ向かったようにみえたが、しかし突如として、その原初の汚穢に呼びかけるかのようだ。もっとも理想的なものが、空中に現れる堆肥の襤褸滓にすぐさま変わってしまうのである。なぜなら花は、葉のようにそのまま老いることはなく、葉のほうは、枯れた後にさえも美しさをまったく失わないからである。しかし花は、年老いた厚化粧の気取り女のように萎れ、自分を雲へ導くようにみえた茎の上で滑稽に枯れ果てる。

大地と天空の間で際限なく演じられるこの死の劇、そこで際立つ悲喜こもごもの対立を誇張してはならないが、明らかに、「愛は死の香りがする」という吐き気を催す

陳腐な文句を、言葉としてよりもむしろ、より厳密にいえばインクの染みのように用いて初めて、この取るに足りない対決を註釈することができるのだ。確かに、欲望は理想美とは無関係であり、より正確に言うなら、もっぱらこの美を汚し、萎れさせるために行使されるようであり、理想美は、生気のない真面目な多くの精神にとってはひとつの限界、定言的命令に他ならないのである。ならば、もっとも素晴らしい花は、老いぼれ詩人たちの駄弁による、天使のような理想の多かれ少なかれ無味乾燥な表現としてではなく、まったく逆に不浄で輝かしい冒瀆として表されるだろう。

この点に関して、植物における花の例外性を強調してしかるべきである。確かに、全体的にみて植物の外見的な部分は、ここで採用した解釈方法を適用し続けるなら、曖昧さのない意味をまとっている。葉の茂った茎の様相は、一般的に力と威厳の印象を引き起こす。おそらく、巻きひげの異常なよじれ、葉の奇妙な裂け目は、植物の完璧な直立においても、すべてが一様に正確ではないことを示している。しかし、田園や森の光景ほど、心の平安、精神の高揚、正義や公正さという偉大な概念を引き起こすものはないのであり、植物の取るに足らない部分は、ときには真に建築的な秩序を示していて、全体的な印象を生み出しているのだ。いかなる亀裂、あるいは馬鹿げた言い方をするならいかなる奇声も、植物の性質における決定的な調和を著しくかき乱

すことはないようだ。花そのものも、地面から天空へ向かうこの広大な動きに呑み込まれ、付随的な役割に、そのうえどうやら意味不明な気晴らしへと追いやられている。つまり花は、平板さを打ち砕きながらも、下から上へ向かう全般的な衝動が生む抗いがたい魅惑に寄与することしかできないのだ。ならば心地よい印象を破壊するには、地面の下で蠢き、虱（しらみ）のように吐き気を催させる剝き出し根の、その幻想的で突拍子もない光景（ヴィジョン）が必要となろう。

確かに根は、植物の見える部分に対する完全な反論となる。見える部分が高貴に上昇するのに対して、おぞましくて粘つく根は、葉が光を愛するように腐敗を愛し、地面のなかで転げ回る。さらに、低いという単語の異論の余地なき道徳的価値が、根の意味に関するこの体系的解釈と関係していることを指摘するべきである。悪いものは、運動の次元では、上から下への動きによって必然的に表されるのだ。それこそが、自然現象に道徳的意味を授けなければ説明できない事実であり、件の道徳的価値は、まさに様相の驚くべき性格に応じて、自然現象から取り入れられているのであり、様相とは、自然における決定的な動きの徴なのである。